

## 稲刈りが好き

志村 良知

生家は専業農家だったので一年中何らかの農作業があり、手伝いは義務だった。大学時代も、外でバイトより家で働くと、春休みは薪山と畑、夏は蚕と田んぼの世話に精出した。

大学時代はする機会が無かったが、好きな農作業は稲刈りで、受験生時代も気晴らしと称して田んぼに出た。当時は田植えも稲刈りもすべて手作業、わが家で耕作していた田んぼは四反歩ほどだった。

田んぼは二か所に分かれており、それぞれ九俵地、山元と呼んでいた。九俵地は藤井平という平地の真ん中にある二反歩余り、ほぼ同じ大きさの二枚に分かれていた。灌漑用水が来にくくて田植えには苦勞するが、稲刈り時には気持ちよく乾燥する田んぼだった。黄金の稲穂の海の真ん中、四方が国立公園の山並みの景色は素晴らしかった。

山元は我が家がある台地からの谷川を用水としていた棚田で、大小五、六枚の田んぼの集合だった。専用の灌漑用水があるので苗代はここに作った。

稲刈りの方法は、乾燥している九俵地は「刈り倒し」、山際で湿地の山元は「稲架掛け」だった。刈り倒しとは刈った稲をそのまま地面に平たく並べていく方法で、数日放置して乾燥させてから束ねる。束ねる作業を「まるける」と称し、一見単純だが確實迅速に藁でまるけていくのは熟練を要する作業である。束ねた稲は、脱穀まで直径二メートルくらいの円筒状の「こぐ」に積んでおく。

稲架掛けでは刈った稲を稲架に掛けるため直径十五センチくらいに束ねやすいように並べていく。真新しい鋸鎌を構え、縦の三条を受け持ち、一、二、三、と三株刈って置き、続いて同じように三株刈って先のもと松葉状に置いていく稲架刈のリズムは楽しかった。山元たんの稲架は、丸太と竹竿を組んだ合掌造りのような巨大な構造物で、これを「うし」と称した。

今思うと田植えも稲刈りも腰をかがめ地面すれすれでの作業で、中高生でもつらかった。この後あつという間に機械化されていったのは至極当然である。